

# 学習者の記憶に強く残る授業は、どのように生み出されるのか

Lecture to strongly win through up to the memory of the student,  
How was it created?

村井淳志 中村淳志

MURAI, Atsushi NAKAMURA, Atsushi

## はじめに

「よい授業」とはどんな授業か、という問いには様々な答えがありうるだろうが、筆者は「学習者が強い印象を持って記憶している授業」が、よい授業の必要条件の第一に挙げられるべきだと考える。こう言うと、「たとえ記憶されない授業でも、知らず知らずのうちに血肉化されているものだ」と言った俗論も聞かれるが、それは教師の自己欺瞞に過ぎないのではないか。少なくとも教育実践研究は、そういう立証不能な推定に満足してよいはずがない。本稿は、「学習者が強い印象を持って記憶している授業」の生成過程に関するエスノグラフィックな（民俗誌的）研究である。

## 調査方法

まず著者の周辺の、県内高校出身の学生に、「高校時代の社会科で、面白い授業だったと印象に残っている先生はいますか」という聞き取り調査をランダムに行った。この問いに対しほとんどの学生は「社会科の授業なんて、何も覚えていない」と語ったが、ごく少数の学生たちが懐かしそうに、「あの先生の授業は面白かったです！」と目を輝かせながら話してくれた。教師や授業内容が強く印象に残っていたため、すぐに授業の風景が頭に浮かんできたらしい。

自分が受けた授業内容について紹介したいという思いも伝わってきた。

「学習者が強い印象を持って記憶している授業」ができる教師は、そもそもどんなバックグラウンドを持ち、どんな思いで、どんな準備をして、どういう経緯でそれができるようになったのか、大変興味深い研究テーマだ。そこで複数の学生から名前が挙がった教師たちに、徹底して密着した聞き取り調査を実施することにした。以下の4名の教諭である。

・石尾和彦教諭（金沢泉ヶ丘高校・世界史）  
石川県出身、石川県金沢泉ヶ丘高校卒業後金沢大学文学部へ進学。大学卒業後は金沢桜ヶ丘高校に9年、金沢西高校に4年、金沢大学附属高校に4年勤務し、現在金沢泉ヶ丘高校勤務。

・向出研二教諭（金沢二水高校・世界史）  
石川県出身、石川県小松高校を卒業後早稲田大学文学部に進学。1年間小学校へ勤務後、大聖寺高校に12年、小松高校に12年勤務し今年から金沢二水高校に勤務。49歳。

・太多誠教諭（大聖寺高校・日本史）  
秋田県出身、秋田県大館鵬鳴高校卒業後、金沢

大学文学部へ進学。大学卒業後は小松明峰高校に6年、金沢二水高校に9年、小松高校に9年勤務し、現在大聖寺高校に勤務。

54歳。

・高橋栄一教諭（金沢大学附属高校・地理）  
東京都出身、都立三田高校卒業後東京学芸大学へ進学、同大学大学院へ進学する。大学院卒業は金沢大学附属高校に勤務。54歳。

また学習者である学生には、授業について  
**結果**

#### 1、生徒の目が輝く喜び

**石尾** 教員には色々なタイプがいると思います。例えば日本史や世界史の研究が好きで教師をしている先生。または教えることが好きで教師をしている先生。附属にいたころに研究が好きな先生は何人かいました。私は教えることが好きで教師をしている方です。その一つのツールとして世界史がある、と思っています。歴史学会とかそういうのには全く興味がなくて、伝えるために勉強をしている、という感じです。授業が楽しいです。子どもたちが「なるほど」という顔をしてくれたり雰囲気を出してくれることがうれしくて、そのために面白い話をしようとか探そうというモチベーションになります。授業をつくるモチベーションはやはり子どもたちですね。塾や予備校の中には授業の様子をビデオに撮って配信をしているところもありますが、目の前に生徒がいなければどんなに内容がすばらしくてもそこには何の喜びもないのだと思うんです。分かった時に子どもの目が輝く瞬間や、成長を感じ取れた時に

て印象に残っていることを話してもらった。

（石尾教諭8名、向出教諭4名、太多教諭7名、高橋教諭2名）今回の調査では、現役の高校生を対象とした場合、教師に対する遠慮から本心を聞けないという可能性を考慮し、現役生を調査対象外として「元教え子」である大学生のみを調査対象とした。そうすることで、高校を卒業後数年経ってもなお印象に残っていることを、逆に鮮明に聞くことができた。

こちらでも喜びを感じます。授業はライブでしかないと思っていて同じ空気を一緒に作っていく中で感じられるものがあるからこそ、もっと生徒たちの表情が輝いたり、もっと「なるほど」と思わせるためにはどうしたらいいかなと考えます。生活していかなくはいけなくて給料は必要ではあるのですが、もっと給料をあげるからもっと努力しろと言われてたら嫌だろうなと思います。先生している人はそういう感覚を持っているのではないのでしょうか。子どもの輝く瞬間は日々の中で本当に些細なことで、今までできなかったことができるようになったり、考えられるようになったりすると、私も嬉しくなります。

**向出** 世界史で取り上げられる事象が好きなんです。だから好きになってほしいし、書かせていることも良いプレッシャーで、書く価値のあるものを提供しようという気持ちになります。あと映画が好きでクリエイトする作業が楽しいです。

**太多** 私の専門は近現代の農村史で研究テーマにしていました。自分が子どもの時におじいちゃんやお父さんから聞いた戦争

など昔の話、自分が大学で勉強した話や、近現代であれば当時の人々が残した資料を見ることができて内面まで探ることができて、これらを合わせることでイメージすることができた時になぜこういう世の中になったのかがよくわかりました。歴史をイメージすることが自分にとって有益だと感じて、また楽しいと思い、この好きなことを仕事にできること、また感動を子どもたちに味あわせたいということから社会の教師を目指すようになりました。大概の歴史の先生はこういった動機だと思いますね。仕事をするうえで生活があるので給料を頂かないと生きていけないのですが、教師という職業の人は給料について無頓着だと思います。授業の準備やその他の仕事を含めて時給換算していたら教師なんかやってられません。予備校の先生みたいに授業を切り売りにしてというふうにするのであればドライに計算して単価を上げる工夫もするのでしょうか、教師はどんな授業をしても、時間をかけても1か月の給料は変わりません。それでもなぜ時間をかけてやっているのかと言うと、やっぱり面白いんですよ。歴史が好きで、自分でいかに伝えてわかってもらえるのか、喜んでもらえるのか、自分が勉強して受けた感動を実際に向き合っている子どもたちに味わってもらえるのかを工夫するのが楽しいです。私なら理解できるだろうという表現で説明した時にそれでもわからないと言ってきます。授業の内容がわからなくて質問に来た生徒には「君の言葉で私の話した内容を説明してごらん。」と言って生徒が「こうで、こうで、こうでしょ。」と説明を聞いた時に授業のどこで思い違いしているのか私が直に聞いて、

どこの説明がわかりにくいかという確認にもなる、このやり取りが楽しいのです。1対40で授業をやり、質問に来て1対1で教えて子どもが「そういうことだったんだ！わかった！先生ありがとう。」と言われた時はやっぱりうれしいです。質問に来た生徒に30分間、言ってしまえば残業のようなことをしたとか、給料も当たらないのがつらいとかそんなことは一切思いません。これはどんな先生でもそうだと思います。子どもに与えたことで帰ってくる感動が一番のモチベーションです。やったかいがあったと思いますから。「先生の授業面白かった」という反応を見せつけられると老骨に鞭打ってもっと頑張ろうという気持ちになります。そういう面で学校の先生は楽しいと感じます。

**高橋** モチベーションはやはり生徒たちの反応がうれしいからです。授業が分かったとか面白かったとか目が輝くので、そのまなざしに応えたいと思うので教師をやっています。自己満足だけとか給料をもらうからとかそんな理由で教師をやっているのはダメだと思います。私は世界一の先生になりたいと思っています。世界一かどうかを誰が決めるかという、それは附属の生徒なので、私の授業を受けた生徒にとっての世界一になりたいと思っています。

## 2、授業への使命感と責任感

**石尾** よりよい授業をしようと頑張っています。こんな映像を使ってみよう、とか論述の指導では、こんな問題を使って半年やっていこう、とかいろいろな挑戦していこうと考えています。教師として、いろいろなアプローチ方法があるんですが、「この

指導に従っていけばいいんだ。」と子どもたちが信じた時に、すごく前向きな力を発揮してくれると思います。もし不安を持って授業に臨むと打ちこめないので、授業に前向きに授業を受けられるように「先生を信じてやればいいぞ」と言うことを子どもたちに言うこともします。もちろんこれ言うためには自分自身が向上心を持って頑張っていないと言えないことでもあります。教師という仕事は子どもたちに育てられると良く言いますが、それは自分の言葉に責任を持つ必要があって、子どもたちに素敵な人間になれとか、がんばれと言う以上は自分がそうでなければいけないので、そういう意味で育てられていると感じています。授業でも自分が楽をして勉強していないのに子どもたちに頑張れとは言えないですね。「先生を信じろ」にはこんな意味もあります。子どもたちの50分の時間をもらうので、取り返しのつかないその時間のために全身全霊をかけてやれるかという、使命感や責任感を持っていれば最初は技術も無く知識もないので上手いかないけないけど面白い授業をできるようになると思います。子どもたちにも伝わって尊敬してくれますし、先生がこんなにやっているのなら頑張ろうと思うようになると思います。こちらがいい加減にやれば子どももいい加減になりますし、生徒はそういうことを見抜く力を持っています。

**向出** 授業の中で一番心がけているのは両立というものかもしれません。授業が受験のための手段でもあり、それだけではなく知的な好奇心を満たすとか、世の中のことがわかって、異文化理解につながったり国際貢献につながっていくという授業、ど

ちらかに片寄るのではなく両方上手く、時にはギャグも交えながらあまり堅苦しくならないようにやっていきたいです。片方ばかり力を入れても堅苦しいだけで、教養といっても堅苦しいし、受験と言っても予備校行くこととは違うんだからと。また、どちらかに片寄ると授業が教師の自己満に終わってしまうんじゃないかな。自分自身が止まるような気もします。どちらかに特化した授業は教師にはとても楽ですから。今後は板書での授業とプリントの授業の良いところ取りできる授業を目指していきたいです。両方の良いところが合わさって新しい展開になってパワーポイントにそういう部分が出てくるかと思います。スタイルは変えませんが変えられるところで良いところを取り入れて、完成と言うことはないのでしょうが去年より良いと思われる授業にしていきたいです。プリントの方が今年もこれでいこうというふうになりがちだろうし、板書やパワーポイントはバージョンアップしていけると思います。質問する時には大事なところを隠しておいて、ぱっと出せば空欄穴埋め型の良いところを採用できる気がします。重要だと思う範囲ではあらかじめプリントを用意しておいてそれを使いながら説明して、それが生徒の手元に残るようにしておいてということを始めている部分があって、構造がわかる骨の部分のプリントを單元ごとに準備しておいて、空いた時間を使って單元ごとのまとめをプリントで説明することをしてしています。補習でやっていたのは3年生になってからだったのでそれを授業の中でできるようになると、一話完結の弱点をフォローできている気がします。3、4回の授業でひとまとめにして

流れ作ってほしい時に一話完結でぶつ切りでは理解できません。プリントを使って上手く弱点を補っていきたいです。ノートに書かせるのだから分かりやすい表現を思いついたらそれもバージョンアップです。バージョンアップは長期休業の時にやっています。冬休み中には1, 2, 3月分の授業を点検してやっています。授業後に反省してメモで残したりもしていました。問題プリントも自作なのでそのチェックもします。問題は2種類あって1つはほぼ授業で書かせている内容の空欄穴埋めと一問一答の問題と二つを見返します。そのために常に発展途上でいなくてははいけません。年度の途中であっても必要があれば臨機応変にスタイルを変えるべきだと思います。

**太多** 自分の授業がつまらないと言われてしまった時に生徒の観察をする必要があります。授業の初めから終わりまで生徒がどういう視線を投げかけて、どういう態度を取っているのか、その時に自分が何をしているのか、発問しているのか教科書を読ませているのか板書しているのか写真を見せているのか、どういう手段をしたときに生徒の目が輝くのか、輝きを失ってしまうのかを意識的に観察しなければなりません。自己検証をめんどうくさらずにしていく必要があります。授業の中でも生き方でも教師というのは生徒の鏡であるので、自分の授業につまらないと反応を示してくれる生徒を持ったことを喜ばなければなりません。何を話しても反応しない、私の授業を必要としてないような顔をする生徒に比べれば、わからないと素直に言ってくれる生徒を大切にしなければなりません。それを踏まえて授業の一部を工夫してみる、そ

の場面だけは目を輝かせてくれるという検証の繰り返しで授業が良くなっていくのです。私も初めから上手かったわけではなく毎日失敗を繰り返してきました。積み重ねがあって今授業が良くなってきました。

**高橋** 質問用紙を作って、何でもいいから質問するようにして、こんな質問が来ていると紹介します。同じような質問も来ていることを紹介すると、みんながそこでつまづいているとお互いに分かります。自分だけが間違っているんじゃないとか自分だけが分からないのではないかと不安に思うことはよくあって、こんなこと聞いたら恥ずかしいとか感じてしまいます。メールアドレスも載せて、いつでも質問できるようにしています。授業のときには思いつかなくてもあとで考えてみると分からないこともあって、いつでも質問できるようにしています。一人が質問に来て、その子に説明しても他のみんなも分かっているだろうと言うこともあって、「こんな質問が来たんだけど他にも分からない人いる？」と聞いて、そうして他にもいれば私の授業の説明が不十分なところで、お互いに学び合いながらそれを可視化して、学び合うことができます。教師が授業でどう工夫するかとか、どう上手にストーリーを考えてやるかとか一方的な立場から授業するのではなくて、生徒からも受け取りながら、以前から目でわかるので実践はしてきたのですが、形にしてきちんと正式な形でお互いに学び合うことを可視化の方が良くなるかなと思います。生徒が今知りたいこととか今わからないことがあるので、それにタイムリーに答えてあげることで知的好奇心をくすぐって成長できるかなと思います。まだ上

手に使えていないので、もっと良い工夫を探していきたいですね。授業中に生徒が寝てしまうことがあるのですが、それは自分の力不足で、面白い授業をしてあげれば寝ないで聞いてくれるんだろうと思います。

### 3、受験から切り離れた授業

**石尾** 受験で学習の意欲を引くと言うよりは学問の本質で引っ張る必要があると感じます。もちろん受験で必要だから覚えなければならぬこともたくさんあり、生徒たちのモチベーションになったりもしているのですが、じゃあ受験で必要ないから知らなくていいのか、ということは問いかけしています。そこさえ子どもたちがわかれば、必要とか必要でないとかいう理由で授業を聞いたり聞かなかったりすることはないのだろうと思います。それは今の学校でなくても前の学校でも同じでした。「世界でこんな問題が起きているけどどうして起こっている？」という問いかけをすると子どもたちは関係ないとは言えないことになってしまうので、その本質のところだと思います。受験で引っ張ってしまうと必要ないからとか関係ないからというように関心を失ってしまうんです。本質がのっかっていて受験を意識させるのは効果があるかもしれませんがその逆では興味を引くことができないと思います。

**向出** 受験とかテストはもちろん大事ですが、それ以外の部分を先生は大事に思っているぞということを心がけています。おおかれ少なかれどんな先生にもあるのでしょう。子どもたちは受験がメインだと思っているかもしれませんがね。自分のやりたい授業をやるためにも受験学力の保障はきつ

ちりやりたいです。一緒にチーム作っている先生たちの足を引っ張ることはできません。きっと小松高校で鍛えられたと思います。受験で使わない生徒を相手にしていることがよい経験でした。受験だけではそっぽを向かれてしまいます。そっぽ向かれても受験を意識した授業をしていくという先生もいますし、それは効率もいいのですが、自分はそこは譲れませんね。みんなに聞いてほしい、受験で使わない生徒にも聞いてほしい、これだけのことはわかって社会に出てほしいということは授業でも言っています。それを伝えるのに押し付けるように言うのではなく、ニュースや映画の話をするなどで、なるほどと思ってもらえるようにしています。受験で世界史が必要と言う子どもも不要と言う子どもにも興味を引きつけられるようになるのでしょうか。

**太多** 同じクラスの中に入試で日本史を使う生徒、使わない生徒、または入試では使うけれど日本史にはあまり興味がない、逆に入試では使わないけど興味はある生徒など様々な生徒がいます。子どもたちに対しては、結果的には受験に使えるかもしれないけれど、私は受験を意識して授業はしないということを生徒に伝えています。授業は歴史の面白さを伝えようと思っています。歴史から遮断して人間は生きていけないと思っています。今自分が生きていることも歴史ですし、自分の親が小さい頃にどのような生活をしていたかを理解できないながらも想像する、関心がいくということは、自分はその歴史の中で生きていて、歴史を作っていく存在であるということにつながっていくので、それを拒否して人間は生きていけないと思っています。そう考え

た時に、様々な思考をもつ、意識の中にいる子どもたちも少なくとも受験ということ、人物の名前や事件の名前を覚えなくてはいけないと考えずに、授業の中で「ふーん」とか「そうか、そうか」と思ってもらえたら私の授業は大成功なんです。誰でも歴史を遮断して生きてはいけないという視点から言えば、どんな生徒に対しても響くような授業はできるはずなんです。

**高橋** 附属には勉強するモチベーションが受験だけでは物足りないと感じる生徒が多いです。生徒のまなざしや食いつきとか「こういうところで目が輝いた。」というのは受験とは関係ないところが多いです。前年の生徒が食いついたところは前もって食いつくとわかるので食いつけるように授業を構成します。そうするとまた別の所で食いついてくる、ということを繰り返しているうちに、受験一辺倒よりも本質の部分の授業をした方が理解が進むというレベルの生徒が多いと思います。受験ででるから覚えろという時には表情が濁ったりします。地理とか歴史とか狭い範囲ではなく、社会全体とコミットするようなことをしたら普段の生活の中で「そういえば先生こんなこと言っていたな。」と感じる機会があると思います。テストで評価されないような授業をしたいと思います。受験をこえていかななくてはいけないのはわかっているので無視はしませんが、その目的に特化してしまうのはさみしいなと。受験に必要な知識を定着させようと教師が一生懸命するのは教育の本質ではないと思います。それはゼミノートを勉強しておきなさいとか問題集をやっておきなさいくらいは言いますが、それよりも事象の本質を理解してほしいと思う

ので用語を覚えることは重視していません。共産主義がどういうことか、資本主義がどういうことかをわかって使えるようにはなっていないという意味では用語は大切ですが、おそらくその用語を覚えることを強調しなくても、中身が分かれば覚えるでしょうね。中身の方が重要ではないでしょうか。

#### 4、感動や驚きを潜ませる

**石尾** 歴史にはいろいろな人物が出てきて、いろいろな出来事があり、そのなかで繰り広げられる物語の面白さも一つです。でも授業の面白さはそれだけではなくて、気付く面白さ、例えば「これってこういうことだったんだ」という面白さもあります。現代と照らし合わせると、尖閣の話が話題になっているときに授業の内容と照らし合わせて「そういうことか」と気づくことが面白さでもあるので、それに出会わせることができたらいいなと思います。自分が本を読んだり勉強していて、自分が出会った感動をどうしたら子どもたちに迫体験させてあげられるかを常々考えています。

**向出** 生徒の興味関心の部分では今何に興味を持っているのか、考えないこともないんですが、基本的には自分と同じかなと思っています。同じということはないのかもしれませんが、先生が面白そうに話していると伝わるのかなと思います。私が世界史をこんなに面白いと感じているので、生徒にも分かってほしいです。新聞に限らずニュースに関心を持てということは生徒によく言っています。授業中にニュースを紹介して歴史的背景を説明することもあります。

**太多** どのような人物には必ず二面性があります。例えば尊氏は弟を謀略で殺すと

いう話をすると子どもたちは驚きます。秀吉や家康にしても権力者には潔白のイメージがあるのです。それを否定するつもりはないのですが、権力=きれいであるというのは幻想にすぎず、生き残るためには裏切りをし、親を殺すこともして権力をえると言う事実を教えなければいけません。子どもにとってはそれが衝撃の事実でとんでもないことを聞いてしまったみたいな感覚になるみたいです。私の授業の中ではたくさんの人が死にます、血吹雪が舞います、首がとびます。こんな話をすると女子生徒はまた始まったという顔をします。ここを話さないで戦国合戦の所をイメージできないだろうと思います。例えば中世の足軽たちは一生懸命戦いますが、目的は勝った時の戦利品で、勝つと好きなだけ相手の物を奪うことができます。殿様から褒められることではなく生活がかかっているのです。この話をすると足軽がそういう倫理で動くんだと驚きながら理解します。応仁の乱の時に坊主を殺して物を奪ったりひどいことをすることにつなげると理解することができます。こういうことを伝えるとイメージがわいてくるし、そういう仕掛をどんどんしていけば、それまでの中学などでつくられた意識を壊されつつも、もう一度イメージを作りかえていくような作業もすることができます。同時に高校生になって考える力もついてくるので、そういう力に教科書を補強するような素材を提供できるのか、そういうことを考えて授業を作っています。

**高橋** 自分の興味関心で「そういうことだったのか。」と思えるレベルを、附属高校だからかもしれませんが、そのまま授業にすることができ、その中で世界のことや世

の中のことなどいろいろなことを知って生徒が「そういうことなのか。」とか「そうなんだ。」という感動を子どもに伝えられることが喜びです。そうして将来世界に羽ばたいて役に立つ人間になってほしいという思いがあります。地理学と言う狭い範囲ではなく、社会を見る目をきちんと作って世の中に貢献できる人になってもらいたい、その手段として地理というものを扱っていると思います。自分が勉強していて「そうだったのか」と思った感動を生徒に与えてあげれば良い授業になると思います。授業に関することを調べていく中で自分が疑問を持ってそれを解き明かしていく中で徐々につながりが分かってきて「これとこれはこういう関係で、だからこうなっているのか」と思ったこと自体を授業にしたら良いんです。だんだんそういうのも無くなってきますが、まだありますね。そのきっかけは生徒で、思い込みで授業するので、当たり前と思って説明していたことが「どうしてそうなるかわからない。」と言われた時に、はっと思って調べると「そういうことか。」と気がつくこともあって、今までの説明が少し違っていたなと思うことが今でもあります。生徒は思いもよらないところでつまずくと言うか疑問に思うので、それも勉強ですね。自分が「なるほど」と思ったプロセスを大切にすることです。指導書に書いてあることを覚えてただしゃべるだけのような授業にはしない方が良いでしょう。

## 5、ストーリーのある授業

**石尾** 1時間の中でストーリーを組み立てていく上で、テクニックとして間の取り



方やテンポの部分で、抑揚や繰り返しをテクニックとしてどのように工夫したらより伝わるのかを考えてはいます。色々なところから学ぶことはできますね。テレビでコメンテーターがどうやって話しているのかとか、古くから言われているところでは落語であったりです。具体的に誰と言うのはありませんがテレビを見ていて無意識で参考になっている人はいるかもしれませんね。内容としては授業の構成が大切です。どうしたらみんなの心をつかめるかを考えることが大事です。例えば授業の初めに価値観をひっくり返すような事実を提示してから、解説していくという構成をしたりします。いかようにも工夫次第で、言ってしまう番組作ったりドラマを作ったりするのと似ているかもしれません。色々なところにヒントは隠れています。最初にサプライズを持ってきて「なぜだと思う？」という展開は一つ典型としてあります。逆にどんどん引きつけていければ進むにつれて楽しくなっていくますし、次の時間が楽しみになる展開もあります。展開は大きく分ければクライマックスとアンチクライマックスの二つになりますね。フランス革命をやるときにはクライマックス型で進めます。大体5, 6回の授業があるのですが、授業を進めていって王様の逃亡が失敗してしまった、次はどうなる、というふうに話が盛り上がっていきます。アンチクライマックスの例としてアメリカの独立革命の時には、「アメリカの国旗はどんな国旗？」という発問から始めていきます。何となく子どもの中にはイメージがあるのですが、言葉だけで説明するならどうするかと答えさせて、それを私が黒板に書いていきます。「線は何本？」

と聞いて答えは最後にわかるからな、という形で独立戦争について授業をします。あとは「アメリカの独立と言うけど独立のために立ち上がった人の肌の色は何色かな？」と聞くと子どもも「え？肌の色？黒かな。」と平気で答えるのですが、ここではあえて答えは言わずに授業を進めていくと最後にわかるような構成にします。こういう問いかけをしてこれがわかったら楽しいという本質が分かるのが授業の本質であったり、細かい内容よりもズバリ本質の方を探るというのが一つの形としてあります。常に子どもに驚かそうとか発見の喜びを味あわせようという気持ちはあります。単元によって組み立ては異なりますね。現代社会だったら、まず子どもに気になるニュースを聞いて授業につなげていけるならつなげていってという感じです。まずは興味関心を引きつけられるかどうかです。どんなにすばらしい話をして、コップが下を向いていたら何も入りませんからまずはコップを上に向けることが必要になります。そのためにクライマックスやアンチクライマックスという構成があります。

**向出** 授業で教える内容は決まっていますが言葉の使い方であるとか構成は創造的な部分なので、自分で作品を作ると言う面で小説や映画とダブるところがあると思います。そういう意味で一話完結を心がけています。導入展開結論がないと伝わらないでしょうね。1時間1時間が切れてしまうのでは感動も味わえないでしょうし。たとえやむをえなく切れてしまう時でもその時間のまとめをすることも大切だと思います。話し方ではテンポやリズムを大切にします。早口に近い速さで話す場面とゆっくり話す

場面とでメリハリが大切です。一対一で話すのとは違うので、それこそ役者になったような気持ちで。もしかしたら無意識に役者の話し方を真似しているのかもしれませんが。あるいは自分が監督演出家になった気持ちでいて自分にこう演じろ、と指示を出しているようでもあるかもしれません。昔からクリントン・イーストウッドが好きだったのですが、まるでイーストウッドのようですね。表情であったりカメラアングルとかも考えてみたり。

**太多** 授業には小説のように感動する場面があります。その感動を大きくするために仕込みや仕掛け、仕掛けと言うのは話の中身や発問の仕方や注目のさせ方などいろいろな手段があります。50分の授業の間、同じペースでやっていると持たせません。やっていてつまらないし聞いている子どもたちもつまらないです。発問をしても感動や刺激がまったくありません。授業が映画や小説であるということは私たち教師が無意識的に行っていることかもしれません。そうでなくては授業ができないと思います。

**高橋** 一つ一つだけではなくて年間を通じてどういうふうに教えたなら何が分かるかということを考えます。大学の授業でもした話ですが、最初の授業で手相の話をしたのですが、それはプロローグの段階で、「この先生変わっているぞ。」と思わせたいです。噂にあの先生教科書使わないぞと知っていて、教科書使わないとはどういうことなんだろうということを思わせておきます。我々が世界の秩序を作っていく時に何を基準にもの考えるかと言うときの合理的な考え方と言うのはどういうことなのか、と

か合理的にものを考えてきたかと言うと人間はすごく非合理的であるということで、その非合理的なところに文化の差が合ってそれが文化摩擦を起こしたり、異民族の理解が進まなかったりするさまざまな障害になっていることをいずれしっかり分かってほしいです。身近なところで私たちは合理的に生きていない、神を信じて占いを信じている話を身近なところでしつと認識させて、遊びながら非常に深い意味を持たせているつもりで、具体的に世界の話をしていったときにそういうことを考えるベースにどこかでなっていれば理解が進むかなと思っています。なぜ授業で一番初めにアメリカを扱うのかと言うと、自分たちの日常や文化と近かったり影響が合ったり情報があったりして考えやすいからです。アメリカはもともとはヨーロッパの分身なのでヨーロッパの話をして、東西冷戦の政治経済のカテゴリーの世界の大枠の話をして、最後はまったく疎遠だけど世界を見る上で無視できないイスラムの話をして世界を考える基本的な土台を作るのが2年生になります。3年生はそこからもう少し具体的に細かく、残りの地域のことをして、それぞれの地域を位置づけて、これは受験を意識しているのですが、そういう単元の組み立て自体がある意味ストーリーです。たとえばソ連の話をしたときに資本主義も問題を抱えています、アメリカも経済低迷したりリーマンショックがあったり、ヨーロッパもイギリス病があったり経済危機などいろいろな問題があつて、社会主義でも効率の問題があつたりして、という話のなかで、社会主義が効率悪いのかということと要因分析を一つ一つしながら最終的にはどうやって改善しよ

うとしたかという話になっていきます。このような教材構成全体にストーリーがあって、その中にたまたま授業が位置づけられていて、という形です。生徒がすごく面白いと感じる単発の授業を重ねていくわけではなく、全体のストーリーの中の一つの授業をしていて、単元のなかに起伏があって、収束してきて次に向かう授業など、授業の中にメインはあるのですが、起伏のある授業ばかりではないです。次はどうなるか、ということで波は出てきます。社会の先生はみんなそうだと思います。50分の授業で毎回毎回ストーリーあるものをやるのは、できたらいいのですが、50分だとつっこめないですね。かといって90分にしたら生徒の集中も持たないです。ストーリーと言うのは1時間のなかでの組み立てもあれば、年間を通じてのものもあるので両方が必要です。

#### 6、効果的に伝えるために確立された授業スタイル

**石尾** プリントを使って進めると、黒板を自由に使えます。板書では、中心に時間軸を書き、また空間軸としての地図を描き、常に今ここの話をしているよ、とわかるようにできるように板書は考えています。世界史はマニアックな話をしているので、今どこを歩いているのか示せるマップのような役割になればと思います。あと、プリントには示さない意味付けのようなものを板書で示せるようにしています。それを常に残していきながら、ワークシートに当てはめる語句を書いています。

**向出** 背中を向けずにずっと生徒と向き合って授業できるのがスライドを使うこと

のメリットであるとよく指摘されます。ノートしてほしいことを全部黒板に書いてしまうと、ずっと生徒に背中を向けていることになります。スライドを用いるようになったのは8年くらい前の小松に勤めていたころで、学校開放講座というものがあって、石川県では10年くらいやっているのですが、その2年目の時です。これは社会人の方たちが夜に学校に来て授業をするというもので、「芸術作品で学ぶワールドヒストリー」というテーマで授業をスライドを用いたのが初めてでした。スライドでないと社会人の人たちを引き付けられないと思いました。「私実際に行ってその芸術品は見たことがあるよ」という方もいたんです。タイムリーに資料や写真をパッと表示できて、これはいいなと思って授業で使おうと思ったんです。この経験の後から授業でもスライドを用いるようになりました。それ以前は黒板に全部書いていて、大聖寺の一年目はプリントを用意して穴埋めのような授業もしていました。でもこんなんじゃ嫌だなと思っていました。やっぱり背中を向けていると生徒も寝てしまったり食い付きが悪くなってしまうというのを感じて、次の学年からスライドを使うようになりました。初めに使うようになったのは倫理の授業です。哲学的な説明で、本屋にある「10分でわかる哲学」という感じの本の図解がとてもわかりやすく、「これを見せたらこの説明が伝わるだろう。」と思って取り入れました。黒板に示すものは一時間分のまとめとしての役割を意識します。例えば年表をスライドと黒板に示す時には、黒板の年表はあまり要素を入れずに、マクロ的に示しています。一目見てその日の学習の流れがわかる

ようなものを黒板で示すようにしています。

**太多** 現在、スライドを使って授業をしているのですが、このスタイルは小松高校の時に始めました。今年で3年ほどになると思います。それ以前はプリントを用意して穴埋めには書き込んでいき、黒板を使って解説していくという形でした。それでは時間がどうしても足りないということで、誰かは忘れてしまったのですが、どなたかの講演会でスライドを使っているのを見て、取り入れようと思いました。ただ、使っているうちに弱点も見えてきました。黒板に書こうとすると何秒かかかってしまうのですが、スライドなら一瞬です。これはスライドの良いところでもあるのですが、生徒がノートを取る時間、自分が待てるのか、沈黙のまま待っているのか、聞き流しても良いので話をしているのかということです。写す時間は生徒によって様々で、一瞬で写す生徒もいれば時間がかかってしまう生徒もいる、標準的な時間を確保しながらも、話すことで間を持たせる、ということもしています。その案配をしっかりとやらないと独りよがりの授業になってしまい、自分が嬉しそうに話をするだけの時間になってしまいます。スライドを用いるようになってから生徒の反応は変わったと思います。特に初めの授業ではスライドを見ます。珍しいからでしょう。しかし慣れてくると、結局は同じ景色でするので飽きてくるんです。資料を開いてここを見て、と言う風に指示をして私も同じ資料を見て口頭で授業を進めていました。同じものを見るのであれば、資料をスライドに出せばいいと気がついて、スライドに注目させることができました。また、私は資料の内容を知っているのです

ライドを見ずに生徒の顔を見ながら授業を進めることができるようになりました。生徒の顔を見ることで授業の内容がわかっているのか生徒の顔を見て確認しながら授業を進めることもできます。スライドを用いる前には、生徒がわかっているという前提で授業を進めていきましたが実際に理解しているかを確認していませんでした。スライドを用いることで一番良かったのは黒板を自由に使えるようになったことです。黒板がどうしても必要になってきます。以前は黒板に全て書いていたので黒板を使って解説することができていませんでした。黒板では生徒の理解を助けるために略図や年表や図を描いています。図説に同じ系図が載っていても細かくてわかりにくければ、焦点を絞って黒板に書いてわかりやすくして示すこともできます。全部がスライドでは限界があります。

**高橋** パワーポイントを使い始めて7年目になります。初めは準備に間に合う範囲だけパワーポイントを作って、それ以外は板書という形でした。全然作りこめていないものの3年でだいたい全部の範囲のパワーポイントが作れました。それを基により良くよりよくしていき、いらないところは削っていきました。現在、95パーセント以上はパワーポイントで授業しています。パワーポイントの良いところは、データを生徒に渡して家でプリントを照らしながら授業を再現しながら復習をすることができます。パワーポイントにはアニメーションが付いているのでどの順番で説明しているのかが分かります。プリントには内容が載っていますが順番までは分かりません。半分くらいの生徒がデータをもらいに来ます。

その子たちは成績が良いですね。パワーポイントを使い初めた理由は、20年くらい教師してきて自分が教える内容の変更はないなというところまで固まって、石尾先生にも触発されて次は板書をきちんとしたいと思うようになって、板書計画を1時間ずつ小さなカードに書き始めました。板書計画を作ってみると完成型しか残りません。私の板書では図をたくさん書くので、どの段階で図を描いてどの説明をするのか、次の年にその板書計画を見ても分からないです。それを他の人に伝えようとしても伝えられません。文字の色を変えてみようとも思ったのですが不便だなと思った時に、そこでパワーポイントにはアニメーションが付いていて順番も付けられるのでメモ代わりにしようと思いました。それで作りはじめてみたら授業で使えるなどと思って取り入れられました。例えばチェルノブイリがどこにあるか、と聞いた時パワーポイントに地図を出せば指し示しやすいです。生徒の手元にある教科書や資料集と同じ図をパッと出せば説明が分かりやすくなります。写真や図と言うビジュアルな資料をパワーポイントでは圧倒的に使いやすいです。黒板から離れて授業することもメリットです。机間巡視しながら遠隔操作で授業が進みます。社会の先生はだいたい黒板の前で授業をしますね。黒板を背にして生徒と向き合っている形になっています。パワーポイントはそれを打ち破る可能性を持っています。デメリットは、スライド1枚進むと内容が消えてしまうことです。黒板は残りますよね。そうすると授業のスピードを標準的な速さに合わせると、ついてこれない生徒が出てきます。黒板だと遅い子は遅

れながらついてこられますし、分からないところがあれば元に戻ることもできて、その子なりの授業の参加ができるのですが、パワーポイントではこちらの速度で授業が進んでしまうのが一番のデメリットです。だから一番良いのは両方使うことですね。今は黒板をどれくらいにしてパワーポイントをどれくらいにしてという兼ね合いを考えています。今年の春先はマグネットのカードにして黒板に貼りながら授業を進めていたのですが、準備が大変でなかなかできませんね。デメリットもありますが、パワーポイントを使うメリットのほうが大きいと思います。

石尾教諭は授業プリント、向出教諭はパワーポイントと板書、太多教諭はパワーポイントと授業プリントと板書、高橋教諭はパワーポイントと授業プリントを主に用いて授業を進めている。授業をよりわかりやすくするために各自が授業スタイルを確立している。各教諭はそれぞれの手法のメリット、デメリットを認識している。

パワーポイントと授業プリントの共通のメリットは黒板を、進行以外の解説としての使い方が可能であることだった。

生徒からは板書に対する感想があった。

**松崎聡美**（石尾先生の教え子） 先生は黒板にいつも地図を描いているのですが、全てフリーハンドでさらさらと描いているのですごいなと思っていました。どこの地図も描けるんじゃないでしょうか。

**谷口こころ**（石尾先生の教え子） プリントとは違う内容を黒板に書いていて、それをプリントにメモするという感じで授業を受けていました。地図がプリントにも描

いてあるのですが、黒板にもまた地図を描いてくれてプリントに書いていない内容を黒板に書いてくれるのでそれをメモしていました。

**西出純基**（太多先生の教え子） 太多先生は授業の始まる10分前くらいに教室に来て、授業が始まるまで黒板に系図とか年表を書いているのが印象に残っています。授業中に黒板に書く時間がないので授業がほとんど止まらなかったです。

## 7. 視聴覚教材の活用

**石尾** プロジェクターの機械を持って行って映画の編集をして映像を見せるのを去年から始めました。あと、音楽は以前から度々用いたりします。とにかくどうしたら生徒を一時間の授業の世界に引き込むことができるのだろうかを考えてやっています。映像などの資料を提示すると子どもたちの反応は違いますし、話せば10分かかるものでも、1分間映像を流すことでわかることは多いと思うんです。そう考えると映像は上手に使えるといいなと思います。ただその編集には時間がかかっていて、すごい労力を必要とします。それでもその効果を取ろうと思えばその労力もありなのかなと感じます。

**向出** 古代ギリシアヨーロッパの範囲には時代を象徴した色々な映画ネタがあって、映画のパンフレットを持ってきたりスライドに映画のワンシーンを取り入れてみたりしています。映画をネタにしようとする、映画が多いのはハリウッドやヨーロッパだったりするのでアジアの映画などは少ないです。そのような面からも授業は古代や中世、もちろん近代のヨーロッパが取り上げ

やすいですね。映画を取り上げる際にはやはり史実をある程度踏まえているもの、あとはわずかなワンシーンだけで教科書に出てくる太字の重要な部分がわかるようなものを選んでとりあげています。動画を教材に入れていこうとするのはとても大変で準備が2時間3時間では終わらなくなってきました。でも準備も基本的に楽しいです。好きだからできるのでしょう。一つのコンテンツがすごくクリエイティブな感じになります。先生によって教え方は当然違うのですが、このような動画を使う授業とそうでない授業ではすごく差があると思うんです。これは教師のチームとしては課題かなと思います。私としては自分が作ったコンテンツをいくらでも他の先生たちに提供してアレンジして使ってほしいという気持ちは持っています。実はインターネットで流してどうぞ使ってください、という風にしたりもしています。実際に使っている先生もいらっしやったり、高校生からメールで質問が来たりしています。将来的にはこんなふうにして作ったものを共有し合うのがなっていく方がいいですね。また、音の世界史という教材も出ていて色々な音が使えます。例えば近代の科学者と倫理観世界観という授業を全10回でしたときに、最後の1時間を研究発表会として理数科のある学校に呼びかけて東北大学の教授も来ていて一番喜んでしたのは蒸気機関の音を流したことで、音の教材というのをこのあと追及していきたいです。

**太多** 目先を変えないと子どもたちものってきいてくれないので、動画を編集して流すこともしています。動画はNHK教育の高校教育講座を流します。全てではなく編

集して流すのですが、大変時間がかかります。めんどくさいな、とは思ってしまうのですが、一度作ってしまえばある程度使い続けていけます。何年かに一度というペースで更新はしていかなければいけませんけどね。例えば元寇の範囲では授業に入る前にモンゴル帝国はどのようなものだったかを表すために動画を流します。流すのはまとめで使うこともあれば導入で使うこともあります。使い方がある程度考えないと、授業でやっている範囲と授業をしている範囲にずれが生じてしまうので意味が薄れてしまいます。どのくらい理解できているかは個人差があるのですが、全員がモニターに注目しています。「へー、そうなんだ。」と見ています。目的はそれなので良いのです。30分の動画を2〜3分に直すためには1時間近くかかっています。5分も流してしまうと間延びして飽きてしまうので、動画は長くても3分くらいにしています。流れとしては動画を見せて、これから学習する内容についてイメージを持たせ、詳しく説明をしていきイメージを膨らませていきます。授業の中で太多ゴントロウという人物を出して生徒がイメージを膨らめやすいように登場させています。

**高橋** 動画も使うことがあります。ただ、画像で十分なものも多いとは思っています。津波が押し寄せてくる動画はリアルで良いかもしれません。人々が生活している様子を数十秒で見せてもわからないと思います。私は2年生と3年生の時で映画を3本見せています。授業の中では見せることができないので、土曜日の放課後自主的にとか、新人戦とか総体のときに残っている受験生が自習している時に見せます。見せる映画

はノンフィクションのもので、ドキュメンタリーではなくノンフィクションです。まず春休みにはチャップリンの『独裁者』を見せます。『キリングフィールド』というカンボジアの内戦の映画を総体の時に見せています。東西対立の代理戦争とベトナム戦争とのかかわりなど、国際情勢を考える上で知っといういいなと思います。チャップリンに関してはユダヤ人の話をしてナチス批判で面白いので。7月の終わりには『遠い夜明け』という映画で、アパルトヘイトを告発したものです。南アは外国に対して情報を鎖国してたような状態があったので、それを告発した内容です。南アフリカ共和国の新聞社の記者が、アフリカの黒人が虐げられていることを本に書いて世界に問うと思ったら軟禁されてしまって、軟禁されている状態から脱出してアパルトヘイトの失態が国際社会に知れ渡ることになり、白人政権の崩壊に結びつくきっかけとなるノンフィクション映画です。それを見せてジャーナリズムは大切だろ、ということをお伝えたいなと思います。『キリングフィールド』や『独裁者』もそうですが、権力に対する正しい向き合い方を学んでほしいという思いがあります。強い者に埋もれて歪んではいけないと言うのは社会科としては必要な姿勢で、当時のナチス批判なんてとてもできる状況ではない中で本質的にあいうことをしていますし、私自身チャップリンが好きでそのとっかかりとしても独裁者を紹介します。

生徒の印象にも残っている。

**山戸駿** (向出先生の教え子) 授業中に映画を見たことが印象に残っています。古

代ローマの話だったと思います。授業を聞いた後なので映画の内容が分かりやすかった気がしました。

**奥村竜司**（太多先生の教え子） 授業中にビデオを見たことが記憶にあります。ビデオが流れるとみんな画面に注目していました。

**寺山里穂**（高橋先生の教え子） ロシアのペレストロイカとグラスノスチの授業が印象に残っています。先生がロシアの写真、首相のいる建物のバリケードなどと一緒に見せてくれたので、実際どんな状況だったのか分かりやすかったし今でも覚えています。映画ではベニスの証人、チャップリンの喜劇、時代背景とかチャップリンの込めた思いとか、先生の主観もかなり入ってたとは思いますが興味深かったです。映像で見るのは心に残っています。

**片野朝香**（太多先生の教え子） 太多先生と言えば「太多ゴントロウ」を思い出します。先生のニックネームにもなっていました。ゴントロウは基本的に悪役でいつも成敗されています。先生が一人芝居で劇をしてくれるので、イメージがしやすかったように思います。試験にはでないような話がほとんどでしたが、印象に残っています。

## 8、学習の意欲を高めるノート、プリントの提供

**石尾** 授業の準備には、深化の度合いがわかりやすさから入って行ったので、授業の内容をいかにわかりやすく整理して伝えるかをプリントや板書作りに反映されていて、プリントはぱっと見た時に内容が構造的になっていることを目指しました。また、世界史では地図が重要だと考えるので、地

図を含めたノートを作れるようにし、自分のノートを完成させたら、教科書や資料集を広げなくてもいいように心がけてプリントや板書を作っています。一回の授業では約 A3 半分から一枚くらい進めていきます。一枚のプリントつくるのには、昔計った時には約 10 時間かかっていた。教材研究にはとても苦労しましたね。教師になって 10 年くらいは、授業が命だと思って授業の間の時間や帰宅してからなど時間を見つけて、何時間もプリント作りにかけていました。その 10 年の積み重ねで現在こうやって授業ができています。

**向出** プリントの空欄穴埋めではテストや受験で出る言葉は頭に入っても SVO という VO の部分に社会的な言葉が出てくるので、書くことでつながって頭に入ってくるので、ボキャブラリーを増やすためにも書かせたいという思いがあります。論述を受験で使う子どもたちもいるのでそのためにも書くことを重視したいです。ただその子たちに合わせるとレベルが高くなりすぎて時間もかかるのでそこに気をつけながらです。授業以外のマンツーマン指導で論述の本格的な指導になりますが、それまでに言葉を知っておいてほしいので SVO で文章を書けるようにしておいてほしいです。ノートを取る量はとても多くて大変かもしれませんが 1 時間の中で燃焼してもらって、授業の後に振り返った時に見やすくまとまっているように心がけています。

太多 私は教科書をまず読んでから授業に入っていきます。歴史に興味がある生徒は自分から教科書を広げて読むこともあるのですが、ほとんどはまったく開かず、まっさらな状態、一日前の授業の内容を半分



近く忘れた状態で授業に臨む生徒もいます。「今日は宋について勉強していきます」と言っても大半の生徒は何が何だかわからないというのが実情です。そこで初めに教科書を読むことでその日に学習する内容をイメージさせます。または宋という単語、乙名という単語一つでも構わないので、目に入れることで浅くてもいいので授業に対する共通基盤を作ることを狙いにしています。一昔前にはこの作業は生徒が自主的に取り組んでたことですが、今の子どもたちは、少なくとも大聖寺の子どもたちは行っていないです。小松や二水でもやってないかもしれません。私はその作業をしなくてはいけないと思うのです。授業の内容によっては授業の後半の方から話すこともしますが、初めに教科書を読んでいるので結論から始まっても理解することができます。それからどうしてそのような流れになるのかの背景を細かく解説していきます。教科書を読むときに波線を引かせたり二重線を引かせることもありますが、生徒たちはなぜ線を引くのかはわかってないと思います。50分の授業が終わった時になぜこの線をここに引いたのかわかるんです。また、テストの1週間前になった時に線を引いてあることについて思いがいくということにもなります。犬のマーキングと同じです。自分が一回でも教科書を見たんだという痕跡を残すことが大切です。丸を書いてもいい、ちょっとしたコメントを加えてもいい、イラストを描いても構わないのです。このページを見たのか、初めて見るのかを自分が分かるようにしておくことが教科書を見返すときのために大切です。プリントでもテスト前には見返して勉強できるように、見やす

いだけでなく面白かったから見返すと思ってもらえるように作っています。

**高橋** 生徒はプリントとノートをどのように併用するかは人それぞれです。授業評価でもよく言われたのですが、先生のプリントはいっぱい書いてあるので書きこむスペースが少ないと言われたことがあって、なるべく書きこむスペースを増やそうと思って空白を増やしました。それで行間を開けて字のポイントを小さくしました。私は見にくいのですが、生徒にとっては小さくありません。参考書の字の方が小さいくらいですからね。今見て後で見なくても良いような資料はプリントの裏に印刷します。かつては資料をたくさん載せていて、授業で説明しないような資料もあって、なくていいものも載せていて、今ではそれを反省していて、情報過多になっていくとまとまらないことになるので、資料は資料集にたくさん載っているの、プリントとしてはどうしても外せない資料は載せますが、それ以外は外すようにしています。もっと削らないといけないと思って、もっと書くスペースを増やすことが今後の課題です。

生徒からも教材の見返しやすさを感想とする声が多く挙がった。

**堀まりあ** (石尾先生の教え子) 石尾先生の授業と言えばプリントでした。プリントは手書きで細かく作りこまれていて見やすかったです。テスト前にはこれを使って勉強を進めていました。大学に入って受けた西洋史の授業にも石尾先生のプリントを持って行って思い出しながら講義を受けていました。

**松崎聡美** (石尾先生の教え子) テスト

の時には問題集よりはプリントを使っていました。どこにこの人物が出てくるとか、出来事がここらへんに書いてあるから、というところまで暗記していました。テストの時には頭に入っているプリントを思い出して、プリントのこの部分を解答すればいいんだな、というふうに解いていました。

**森脇**（石尾先生の教え子） 石尾プリントには色々な情報が詰まっていて見ていて面白いです。3年生で世界史が石尾先生から代わってしまって一番つらかったのは石尾プリントをもらえなくなることでした。

**土田幸穂**（太多先生の教え子） 教科書を授業の最初に読んで線を引いてあるのでテスト前に教科書を見返すとどこを覚えるべきかが一目でわかりました。テスト前になって線の意味が何となくですがわかった気がします。

**泉萌子**（向出先生の教え子） 先生の授業はノートを取る量がたくさんあったのでとても疲れました。進むのが速い時もあったので。しかし、テスト前に読み返すと書いていたことを思い出せて、流れが分かりやすかったのでテスト勉強しやすかったです。教科書を見返してテストに備えるというよりもノートを見直してテストに臨んだ記憶があります。まわりの人もそうやっていたと思います。

**寺山里穂**（高橋先生の教え子） 社会のプリントは語句を埋めがちになりやすいですが、テーマに沿って図やグラフもふんだんに使われているので、復習するときにはぱっと見て内容を確認できる場所は良かったです。またアメリカについて学ぶとき、授業プリントのほかにアメリカの自然、歴史、対外関係などアメリカが凝縮された1枚のプリントをもら

うのですが、習ったあとに見ると、すべてが関連して地理を捉えることができとても便利でした。今でもプリントは全てあってたまに読み返しています。

## 9、学力の保障

**石尾** 世界史に興味はあっても点数が取れない生徒のために点数の取り方を指導するのも大切なことです。例えば教科が面白いと思う入り口は二つあると思います。本質的なところで「なるほど」というところがどんどんつながってくる、発見や気付きや理解と言う面白さが一つ。もう一つは、その上で点数をとれるという面白さがあると思います。例えば授業の中での質問は試験で実際に問われることであるわけで、これに答えられるように知識を整理すればいいんだとかインプットすればいいんだなということがわかると勉強しやすくなります。するとテストで点が取れるようになり、週末課題を繰り返していくうちに、世界史ではこういうことをアウトプットできるようになると点が取れるようになるということに気が付きます。点が取れるようになるには授業の中や課題で手助けしています。まじめにやっていけば自然と点が取れるようになると思います。

**向出** 世界史が好きで点数が取れない生徒もいます。授業の最後の一問一答を数問出し、必ず1週間に一度確認テストを行って、再テストも課すという風にしました。つい最近のことです。これは自分でやろうと思って、生徒が自信を持てるところまで引き上げてあげればそのあとは自分の力でいけると思うので続けていこうと思います。論述では表現力とか思考力という今よく話

題にされることを身につけさせることはできるのですが、それは進学校の世界史の授業としてはどうなんだろうと思います。生徒が求めるものは、楽しさだけではなく、学ぶ意義と言うのも強調しながら、知識の定着というものと両立させたいと思うんです。3年生になれば放課後や長期休業で補習や土曜ゼミがあるので、そういうところに出てくるのは受験で選択する生徒で、苦手な生徒が点数を上げられる教材を提供していければいいと思います。自分は骨プリントと肉プリントと呼んでいます、木に例えると幹があって枝があるところまでが構造でそこにくっついている葉っぱが肉プリントになります。テストで問われるのは肉の方ですが、流れとか構造をおろそかにするとすぐに忘れてしまいます。葉っぱが散ってしまうように。だからきちんとした幹と枝を作っておきながら葉っぱも増やしていきます。骨プリント骨は構造が分かるもので空欄穴埋めなんだけどざっくりと流れをメインにしている、イギリスとフランスの年表を並べて横に注目させたりするもので、肉は細かい人物や出来事です。二種類の教材を用意しています。小松高校の頃にビートルズの赤版青版のアルバムにあやかって自分で冊子にしたことがあります。授業自体は板書ですがプリントにしたものと一問一答と見開き2ページで全部の授業分、全159回の前半を赤、後半を青にしました。解答もつけてこのまま売れるような状態にしました。それはそのときで終わっているのですが、色々補って作り直そうかと思っています。年度当初から生徒の手元があればいいのかなと思います。プリントは紛失してしまうのですが冊子にしてし

まえば無くさずに済みます。教科書と違って進行の見通しもつきます。自分が考える時代区分や地域区分を最初に説明してあるという体裁を前のものからなっていたのですが充実させて付録にして載せておきたいなど。どこか出版社が目をつけてくれたらうれしいななんてことも考えています。材料も蓄積してきたのであとは取りかかるだけです。

**太多** 入試ではどうしても生徒が暗記しなければいけませんので、問題演習をさせたり補習をしてあげなければなりません。その補習の時には問題演習をして解説をするのですが、私の授業での内容を思い出させることを心がけています。授業でやったと言えば、はっとする生徒もいますし、必ず教科書を持ってこさせるので、開くと色々な下線を引いてあるのでそれを見て思い出すこともできます。そういう形で、受験へ向けた対策を行っています。政治史については現在の形でも十分受験水準の知識は得ることができていますが、社会経済史は問題演習を中心にして取り組まないと難しいと感じています。文化史も同様です。

**高橋** 生徒が生徒に問題を出させるのは3年くらい行っています。それは今小松高校の地理の先生が桜ヶ丘にいた時にやっていたのを見てはじめました。私は3問出させています。これはすごく効果的だと思います。プロジェクターを準備する時間がもったいないというのもあったのですが、次回出題する生徒は前の時間授業をしっかり聞きます。成績にも3割程度加味するので、生徒が3分ほど早く教室に来るようになります。早く来た生徒は自分で復習します。たった3問だけなので、前の授業のなかで

何が本質的に重要かということを考えなければならず、答える方もどこがでそうかと考えながら復習します。テストが終わった段階で前の授業の復習がある意味終わっています。それをしないと授業の初めに前回の授業を私が丁寧に説明しなければなりません。それをする必要がなくなります。だから3分5分をかけても時間の無駄にはなりませんし、小テストをする時間は積み重ねるとすごい時間になりますが、進度が遅れるかと言うとそんなことはありません。あとは出題者になるという経験をさせるとメリットがあります。プレゼン能力が必要で、自分の出したい問題をどういうふうに関連わずに言葉でひきだすのかということです。授業の本質が何かを考える必要も出てきます。これが生徒同士の学び合いの場になります。その質問の仕方をみて、生徒がどこを理解していてどこを理解できていないかの確認をすることもできます。そういうチャンスも生まれます。できれば他の社会の先生にも実践してほしいなと思っています。普段予習復習をしないでテスト前に一夜漬けするときにはほんの少しプラスアルファするだけで濃い授業になるのかなと思います。家で勉強しなくてもいい代わりにそういうところで少し勉強させる工夫です。テストを早く返すこともそうですが、フィードバックを意識することが大切で、やりっぱなしとか定期テストの結果だけで評価するのは古いかなど。たまにものすごく良い問題出す子がいたらその場で褒めて、他の子も頑張ろうという気持ちになります。何が良いか悪いかも分かります。3年生になると問題に工夫をするようになって、良い問題が多くなっていきます。問題

を出す姿をみて生徒同士の人間関係を形成するのに役にも立っていると感じます。自分の授業時間を3分与えるのはしゃくなんですが、生徒のことを思って続けています。生徒も楽しんでと思います。5問にすると単純な単語を聞いてしまう可能性が高くなるので、できるだけ本質を考えてほしいので3問にしています。3問であれば単純な単語と言うことにはならず良い問題になるのかなと思います。また、テストの答案を返すのは必ずその次の授業でするようにしています。翌日が授業であれば、徹夜で丸つけしてでも返すようにしています。鉄は熱いうちにたたかないと、答えてそれが冷めないうちに評価してあげたら定着します。忘れたところに答案を返されても点数だけが分かって中身が分からなければ意味がありません。私はすぐに返すので点数が独り歩きすることはありません。ここがわかっていなければ点数が良くても理解していない、ここが合ってる人は点数が悪くても本質がわかっているから覚えていないだけだから安心しろ、と言っていて、常に鉄は熱いうちにたたく方がいいはずです。28年間で次の日に返さなかったのは記憶にありません。社会科は英数国と違って予習復習をしないでテスト前くらいしか勉強しないことです。短期集中型で勉強したことを定着していくことにはこちらも短期で答えてあげないといけないと思います。例えば成績上位者を発表するのですが「あいつに何点負けた、どうして負けたんだ。」とどこを間違えたか見たときに、半月後にテストが帰ってきて冷めてしまいます。できる先生はするべきだろうなと思います。いかに他の教科よりも省エネで理解させるかと

言うことは考えています。

## 考察

一言で「子どもの記憶に残る授業」と言うが、いかに無数の努力・工夫・意欲によって創り出されていくものなのか、読者にも伝わっただろうか。まさに彼らは、映画のプロデューサー兼ディレクター兼メインアクターなのだ。こうした努力を何もせず、教科書と指導書のみで授業を進めたり、大学入試の過去問を解けるようにするだけの授業とは、子どもたちに与えるインパクト、その後の社会や歴史への関心の持続に、莫大な違いが出てくることは明らかだろう。日本の歴史教育・社会科教育は、こうした教師たちによって支えられている。